空気少女と王子様

黒猫ももか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空気少女と王子様

【Ｎコード】
Ｎ０２９９Ｖ

【作者名】
黒猫ももか

【あらすじ】
庶民のリシェルはある森で宮廷魔術師に強制的に王城に連れて行かれた。そこで「王子様のお世話をして下さい」と切羽詰まった様子で懇願され快く了解してしまった。リシェルは存在感を消すのにとてもたけていて容姿端麗な王子にも色目を使わずに過ごしていた。そんな女嫌いな王子様と空気な少女の異世界恋愛ファンタジー。かもしれない↑

00　プロローグ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

多くの国で戦争が盛んに行われ、年間年万人という人々が戦死した。

その家族もまた、戦争で死ななくても父親が、母親が、兄弟が、友が死んでしまうかもしれないという恐怖。

そうして、やがて大陸中で戦火が巻き起こった。

大人も子供も女も男も何もかも関係なく無差別に殺されたり、国の貴族たちばかりを狙ったり。

いずれ、その戦争は一人の英雄によって静かに幕を閉じた。魔物の出現と同時に……。

国民たちはあれほど多くの被害者が出たにもかかわらず静かに幕を閉じたことに驚いた。

他国との交易も順調で、戦争など1つもなくなった。

しかし、その終戦の裏には悲劇があった。

一般には英雄といわれている青年は自らが魔王となり、魔物を出現させることで国同士の争いをやめさせたのだった。

その歴史を貴族たちは隠した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そうなんだ……」

一人呟いた声は誰にも聞かれることなく静かに消えていった。

００　プロローグ（後書き）

はじめまして、黒猫です。
この小説はのろのろ更新ですが宜しくお願いします。

01　少女の過去と精霊

それは、私の十四歳の誕生日のことだった。

いつものように他人に迷惑にならないように朝もしっかり誰にも起こされることなくひとりでに起き始め、邪魔にならない程度に家の手伝いもした。

季節は厳しい冬を越え、優しい春の初め。王都にほど近い私の住んでいる家の人たちは、毎年この時期になると王都の方へ物を売りに出かける。その間、私はすることもなくただただボーっとした時間を過ごしていくのみだった。

「それじゃあ、リシェルちゃん。お留守番よろしくね」
「はい。お気をつけて下さい」

それから数日、毎日起きては近くにある森の中へと散歩に出かけた。毎日毎日その森の中にある湖へと足を運んでは水の精霊たちと一緒に湖のほとりを走り回ったり時には座り込み談笑をして時を過ごした。湖には薄氷（うすらい）が張り巡っており、春の暖かな光に照らされて美しく輝いている。

『リシェル様、どうかなされましたか？』
「ううん、別にどうもしてないよ。どうして？」
『いえ……リシェル様が珍しく悲しげな表情でしたので心配になり……』
「そっ、そんなことはないよ……ごめん。あと、心配してくれてありがとう」

私には小さいころから精霊のご加護があった。そのため、精霊を

見ることもできたし話すこともできた。それなのに、大人たちは誰ひとりとして信用してくれる人はいなかった。理由の一つに私の両親が早くに死んでしまったということもあるだろう。

＊＊

精霊は王族のみしか見る事は出来ないのだ、という伝承が受け継がれており、「一庶民のお前に見ることなんかできるはすがない」と大人たちは言う。「かまってほしいからそんな嘘をつくのだ」と。

瞬く間に私は嘘つき呼ばわりされて、私の周りには誰もいなくなっていた。そんなとき、語りかけてくれたのが精霊たちであった。私はまだ幼かったため、「精霊達のせいで仲間外れになれた」などと八つ当たりして精霊たちを無視し続けた。

ある日、毎日部屋で閉じこもったままの私にいつものように精霊たちが語りかけてきてくれた。

『リシェル様っ！　元気を出して下さい。また私(わたくし)たちと遊びましょう？』

『リシェル様、今日はとてもよい天気ですよ。外に出て散歩でもしましょう？』

「うるさいっ！　うるさいうるさいうるさい。もう私なんかほっといてよ！」

久しぶりに発した私の声は精霊たちに暴言を浴びせた。それなのに、精霊たちは嬉しそうに顔を見合わせた。皆が皆、同様に微笑んでいた。

ふと、外をが目に入った。精霊たちの言うとおり、麗らかで綺麗な空の色をしていた。涼しい風が窓から入り込んでくる。

『ふふ、リシェル様。漸(ようや)く私(わたくし)達と口をきいて下さいましたね』

「えっ……」

あっけにとられた私はポカンと口を開け、首をかしげた。幼い私の思考回路は完全に停止してしまっていた。窓から風が入りカーテンがブワっと膨らみ、一瞬にしてへこむ。その動作を繰り返し続けている。

あっけにとられている私を尻目に風の精霊たちが話しかけてきた。

『リシェル様。私(わたし)たちは、貴女を大好きなのでございます』

『ですから、どんな暴言を浴びせられようとも……無視し続けられても見捨てる事はありません』

「でも……」

『大丈夫です。私たちも悪かったのです。なにも見えない人間などの前でリシェル様に話しかけてしまったので……』

突然の告白に戸惑う私を余所に、周りに集まっている色とりどりの精霊たちはそれぞれに喜びを分かち合っていた。中には踊ったり、歌ったり……皆、楽しそうに声をあげて笑っていた。

その様子を見ていた私はいつのまにか怒って……そして悲しみに暮れていたことも忘れて、精霊たちの美しく綺麗な旋律の唄に耳を傾けていた。楽しそうな会話に混ざったり、精霊たちとともに笑い合っていた。

それらが一段落したところで、私は精霊たちに話しかけた。

「皆、聞いて。私、みんなは悪くないって分かってたのに……それなのにみんなのせいにして」

そこでいったん一呼吸置いた。精霊たちは何も言わずにただ黙って静かに私に注目していた。そして、私はゆっくりと言葉を選んで続けた。

「だから……まずは、本当にごめんなさい。そして、こんな私でもいいなら……これからも仲良くしてもらえたら……」
『勿論です、リシェル様。先ほども言ったでしょう？　私たちは貴女を大好きです、と』

一人の水の精霊が代表して口を開いた。その途端に精霊たちから物凄い歓声が起きた。もちろん、他の人には聞こえない。だけれど、私にしか聞こえないその歓声はとても心に響いた。

＊＊

『リシェル様ー？　また過去のことを思い出していらしたんですか？』
「ん？　あ、ごめん……つい」
『まぁ、リシェル様は何をしていてもお可愛らしいですけど』

お世辞が上手な子たちだな、と思う。本人たちに言ったら驚いたように目を見開かれなにやらコソコソと私に聞こえないように話していた。
湖の表面に輝く氷の下からかすかに見えるスカイブルーがほとりの新緑によく合っている。もっと赤系の色が欲しいの気もするのだが春が始まったばかりのためまだ何の花も咲いていない。

『リシェル様ー、そろそろお帰りの時間ではございませんか？』
「うわぁ、本当だ！　ありがとー水の精霊さん達」
『いえいえ～』

しばらく歩くと、昨日降った雨のせいかぐちゃぐちゃの土の地面に差し掛かった。この道を通るのが一番の近道なのだが、これでは

進みづらい。だからといってここまできて遠回りをする気にもなれない。私は覚悟を決めて一歩踏み出した。

『リシェロ、いそげいそげ！』
「分かってる。でもちょっと、ここ……走りずらいし」
『ったく、仕方ないなぁ』

土の精霊たちが集まって来て、一部の土を歩きやすいように固めてくれた。私は土の精霊たちにお礼をいい、固めてくれた土の上をしっかりと踏みしめて走り出した。……はずだった。
一歩踏み出した時はなんともなかったのだが次の瞬間踏み出した足が地面に着くことはなく、そのまま私は頭から突如現れた穴の中に落ちて行った。

01　少女の過去と精霊（後書き）

おはこんばんわ、黒猫です。
うん、プロローグ何処行った！？
プロローグの謎は以後解けるのか……？（え

02　王城と宮廷魔術師

落ちた穴の先は、静寂につつまれた真っ暗な闇だった。雰囲気はひんやりとしているがどこか柔らかい感じがする。初めは突然の暗闇でなにも見る事が出来なかったが徐々に目が慣れてきてかすかにどのような所か分かってきた。

目が慣れてきた途端に光に包まれた。突然ついた灯りに眩しくて目を閉じた。

「こんにちは、リシェル・ロー様」

低くて艶のある聞き取りやすい声が静かに響いた。灯りと同様に突然の出来事だったため、眩しくて閉じていた目をパッと開いた。

目に映ったのは優しそうで綺麗な青年だった。銀色の髪は無造作に後ろで一つに結び、目の色は澄んだ水色。式典でしか見る事の出来ない魔術師のローブ……白を基調とし、裾の方と襟に金色の線が入っている。その線は位によって数が違うらしく、式典に参加している魔術師たちもばらばらな本数だった。

「は……？　名前、どうして……」

「とりあえず、急に王城まで移動（テレポート）してもらってありがとうございました」

私の質問は優しそうな微笑みによって流された。

さっきのはおそらく、移動（テレポート）の魔術陣だったのだろう。私は一度も使ったことがなかったがあ、のように穴に落ちるような感覚はもう二度と味わいたくないような気もしたが使うことができたらとても便利だろう。

待て待て待て。‘王城に’と言わなかっただろうか。私は両親共

にいないし、居候させてもらってる身なのに入れるはずがない。私の居候先の大人たちですら、そうやすやすとは入れないのに。

「その……ここは本当に王城なんですか？」

「え？　……あぁ、はい。なんならこの部屋から出てみますか？」

「出られるんですか？　それなら是非！」

魔術師の青年に連れて、部屋を出た先には優雅な……そして威厳のある王城があった。城のすべてが視界にうつらないほど近い。私は遠くからしか王城を見たことがなかったため、目を見開き驚いた。

日が落ち始めている。かすかにオレンジ色がかったの光が降り注いでいる。

「ほ、本当に王城だ……」

「信じていただけましたか？　リシェル・ロー様」

「まぁ、この王城見てしまったら信じるしかないですよね」

「それでは、私（わたくし）たちのお願いを聞いて下さいませんか？」

肌に心地よい風がふき、私の髪と目の前の青年の髪をサラサラと揺らしている。私は無意識に眉間にしわをよせて青年の綺麗な瞳を見つめた。

お願い？　何を？　私なんかに何のお願いがあるというのだろう。

「ふふ。なに、大したことではないのです。いや、大したことか……でも、貴女なら大丈夫ですよ」

「なにそれ……ま、まずなんで私なんですか？」

「えっと、貴女はなんていうか……その、なんですかね。他の女の人と……違う、といいますか……その、えっと」

魔術師の青年の遠まわしな言い方に物凄く違和を感じたがなにも

言わずにじっと見つめた。魔術師にお願いされることとはなんだろう。まず、なぜ庶民の私が！？

「お願いとはなんですか？」

「それはですね」

そこでいったん言葉をきり、静かに私の瞳を見つめた後、言葉を続けた。

「王子様のお世話をして下さい」

私は親切心が強い訳でもないのだが、私の手を握り、さっきとは打って変わって切羽詰まったように上目づかい、で綺麗な人に頼まれて断るのは野暮ってもんだろう。しかし、王子様のお世話とは具体的に何をするのだろう。

夕焼けに染まる王城の壁が視界に入る。もうすぐ家の人たちが帰ってくるだろう。

「もちろんです。でも、私……家の人たちにどう説明すれば……」

「それは、こちらがしておきます。なんなら、城の近くに越して来れるよう手配しましょう」

「ありがとうございます」

こうして、私の王城での生活が始まった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それでは、さっそく王子様のお部屋へご案内させていただきます」

「あ、はい」

出た扉とは違う扉から入った。
さっきまでいた部屋もそれなりには豪華だと言えば豪華だったのだが、今入った場所はそれよりも豪華だった。大理石の床、煌々と輝くシャンデリア、派手なドレスで着飾った女性たち。何もかもが新鮮で辺りをキョロキョロとさわがしく眺めていった。これほどもう一対の目があったらいいと思ったのは初めてだった。

「さぁ、こちらですよ」
「あ、待って下さい」

いくらか城内を歩いた後、そういえばまだ名前聞いていなかったなと思い、訊いてみることにした。

「あのー……」
「なんですか？　私に何か用ですか？」
「名前、なんて言うんですか？　まだきいてなかったので」
「あぁ！　忘れてました。宮廷魔術師長のシアン・ラファエルです」

シアン、か。宮廷魔術師長とかすごすぎる。宮廷魔術師になるためにはいくつもの難解な試験を高得点で合格して、実技で満点をとる。もしくは試験で満点で合格して実技で高得点をとるしかない。でも、この国には２０人ほど宮廷魔術師がいるらしい。そのなかでも魔術師長になれるのはたったの一人。私には次元の違う話でどんなに頑張っても合格するには一生かかるだろう。

「すごいんですね、シアン様は」
「貴女は、様付けは止めて下さい。」
「どうしてですか！　宮廷魔術師長になるのはとても難しいときます。それを乗り越えて宮廷魔術師長になったんですからすごいじ

ゃないですか！　そして、さっきから視線がなんか痛いです！」
「ふふ、そうですね。リシェル・ロー様は可愛らしいですから」
お世辞が上手だなぁ、皆して。褒めても何にも出ないのに。一体何が目的なんだろう、といつも思う。それに、私が庶民だからみられているのだろう。そして、シアン様が綺麗な顔をしているからだろう。あれは絶対嫉妬の視線だよー。

「視線が痛いですー」
「それじゃあ、僕のローブの中に入りますか？」

……それじゃあ、逆効果だろ！　シアン様はさっきまでの優しそうな笑みを一転させ少し意地悪そうに微笑んだ。うわー確信犯だ。絶対、逆効果だって気付いて言ってるよこの人。
さらに視線が痛くなったが私は気付かないふりをした。これ以上気にしていたらきりがない。

「もう少しですよ。大丈夫ですか？」
「だいじょーぶです。これでも体力には自信があるので」
「おぉ、頼もしいですね。でも、そんなに頑張んなくてもつきますよ……あ、ココです」

気がつくと、今見てきた城の中で一番綺麗な装飾を施された大きな扉の前にいた。

02　王城と宮廷魔術師（後書き）

おはこんばんわ、黒猫です。
……なんだこれは！！！！！
また王子が出てこなかったではないか！！！！！（（↑
まぁ、出す気なかったんですけど（ぉぃ

03　王子様と精霊

「ここが、王子様のお部屋になります」
「は、はい。綺麗なお部屋ですね」
「そうですね。しかし、国王陛下と王妃様のお部屋はもっとすごいですよ」

ここよりすごい装飾のある扉……私の乏(とぼ)しい想像力では想像もつかない。紅をベースにした扉は今までの白や銀や青などといった色に対して目立っていた。しかし、浮いてはいない。きちんと白や青とも協調し合っている。
なんでここだけ紅なんだろうと不思議そうな目で見ていたのかシアン様が親切に教えてくれた。

「くすっ、王子様は紅が一番お好きなんですよ」
「……そうなんですか。だからここだけ、色違うんですね」
「はい、そうです。では、入りましょう」

シアン様がゆっくりと扉をノックする。その様子を見ながらドキドキと心臓の鼓動が激しくなっていくのが分かる。緊張しているのだ。この国の王子様なんかに一生お目にかかることもできないと思っていた。ましてや、お世話をするなどという大役など絶対に回ってこないと思っていた。

「宮廷魔術師長シアン・ラファエルです。至急、殿下に会わせたいお方がいらっしゃります」

私は深呼吸を二回し、心を落ち着かせ静かに待った。……数秒あいて「入れ」と中から思ったよりも高い声がした。王子様はもっと

低い声のようなイメージを自分の中で持っていたので少しがっかりした。ん？　待って、自分。なんで私はガッカリしているんだろう？

「失礼いたします、殿下」

「……おい、シアン。お前が会わせたい奴とはどこにいる」

「はい？　ここにいるじゃありませんか」

シアン様に隠れるようにして立ち後ろから頭を少ししか出していなかった私の手をとり、トンっと軽く前に押し出した。私は不安げにシアン様を見上げたが、優しそうな微笑みで見つめられてしぶしぶ前を向くことになった。

王子様は向かいにある机の奥の椅子に座っていた。少し癖のある綺麗な金色の髪……瞳は激しく燃える炎のように紅色。顎の下で組まれた指はすらりとして傷一つない。街の少女たちの噂通りの容姿のよさだった。

私は何をしたらいいのか分からずにじーっと王子様を見つめていたら、後ろから笑い声が聞こえてきた。

「リシェル様、自己紹介をして下さい」

耳元でシアン様に囁かれた。少し笑いを含んでいる低く艶のある声に私は少しビクッとし、頬を赤らめた。じょじょに赤くなっていく顔に反するように平常心平常心と心の中で唱え続けていた。

ようやく落ち着いたので一つ大きく息を吸ってから自己紹介を始めた。

「えっと……リシェル・ローです。いつからかは分からないんですけど、貴方のお世話をすることになりました。好きなことは自然の中でのんびりすることです。宜しくお願いします！」

「……シアン。どういうことだ？」

最後の言葉と同時に顔を深く下げた。すぐに顔をあげようかとも思ったのだが一応許可を得るまで床に敷き詰められている絨毯をじっと見ていた。それから、数秒の間があった。すると、王子様の明らかに不機嫌な声が聞こえ、驚き顔をあげた。

王子様はその端麗な顔を不機嫌そうに歪めていた。そして、燃える炎のような瞳で鋭くシアン様を睨んでいた。それに対し、シアン様は涼しげな顔で微笑んでいる。

「お前、俺が女嫌いなことわかってて連れてきてんだろ！」

「おや。殿下は女嫌いだったんですか？」

「その台詞、前回もきいたんだが……」

シアン様と王子様のやり取りやなかば呆れたように肩を落とした王子様がなんだか面白く感じてしまい、笑ってはいけないと思ったが押さえきれずに吹き出してしまった。

「お前、リシェルとか言ったな。何を笑っている」

「い、いえ。気にしないで下さい殿下」

「お前が言うと気持ち悪いな」

何を失礼な。私に何と呼べと？　むっとなり笑っていた顔がたちまち不機嫌そうに歪む。相手が王子様だということも忘れて睨みつけた。すると王子様の瞳が限界まで見開かれた。その様子を不思議に思った。

「……シアン、こんな奴もいるんだな」

「そうですよ？　それでは殿下も自己紹介を」

「ライリート・ウィスタリア・シャルトルーズだ。好きなことは無い。嫌いなものは女だ」

「それでは殿下、少々お待ち下さい。リシェル様、そこから動かないで下さい」

シアン様が私に向かって魔術を使いだした。徐々に自分の体の周りが淡い青色に輝いていくのが分かった。シアン様は私の方に向き、目をつぶりその低く艶やかな声で詠唱をしている。よく見るとシアン様は男の人なのにまつ毛が長くて肌も綺麗なことが改めて分かった。

じっとシアン様を観察していると急にシアン様が目を開き真正面から視線がぶつかる。シアン様は優しく微笑むと詠唱の声を少し大きくした。

すると、淡い青色の光が限界まで輝いた。

「さてと、これでいいですね」

「うわぁ！　メイド服ですか？」

「まぁ、そんな感じです。王族直属世話係専用服です」

まぁ、なんて堅苦しい名前なんでしょう！　と思ったがニコニコ微笑むシアン様にそんな言葉言えるはずもなく私の心の中でとどまった。

王子様は言葉もなく目を見開きそれからフイっと顔をそむけた。かすかに頬が赤かった気もするのだが熱でもあるのだろうか。

「さっきよりは見れるようになったぞ」

「そ、そうですか！　よかったです」

これで気持ち悪いとか言われてもショックだけども。しかし、さっきの態度からするともっとツンツンしているのかと思っていた。女が嫌いとか言ってたし……。

『リシェル姫、王城へようこそいらっしゃいました』
「あぁ、火の精霊さんはじめまして」
「……おい、お前誰と話しているんだ？」
「えっ……はっ！　い、いえなんでもございません」

しまった。つい気が緩んで人前で精霊と会話をしてしまった。隣の火の精霊もしまったというような顔で私を見つめてくる。村の人たちですら信じてくれなかったのに王子様や宮廷魔術師が信じてくれるはずない。
でも、それでもいいかと思っている自分がいる。王城に来れたのは夢で明日からいつもの日常に戻るのではないだろうか。

「もしかして、リシェル様は精霊と会話できるのですか？」
「へ？　いや……その」
「リシェル様？　嘲笑ったり貶そうと思ってきいたのではないのですよ。真実を知りたいんです」

シアン様の怒るでもなく同情するでもない優しげな柔らかい声色に私は知らず知らずのうちに口を開いていた。

「はい。私には精霊たちを見る事が出来ますし、話すこともできます」
「本当かっ！」

座っていた椅子から立ち上がり机から身を乗り出してきいてきた。その王子様のものすごい剣幕に驚きビクッと体を縮こませた。そして、少し指先が震えてきた。昔の……興味本意で精霊のことを訪ねてくる村の男の子たちに見えた。
それに気付いたのかどうかは分からないがシアン様がローブで包んでくれた。小さく「ここには殿下と僕と貴女しかしません」と気

遣うように言ってくれた。

「殿下！」

「……すまない、俺としたことが」

火の精霊たちも私と同じように昔のことを思い出していたらしく、髪の毛を逆立てていつもより派手に輝いていた。

『姫、あいつらムカつく』

「おっ押さえて……お願い」

『姫……姫のつらそうな顔は見たくない』

私がローブの中から顔を出すと、さっきのローブの中での出来事は外にも聞こえてたらしく、シアン様と王子様は驚きの表情で見つめ合っていた。

「俺にもかすかだが紅に輝くものが見える」

「僕にも声までは聞こえませんが一体だけ見る事が出来ます」

「！　本当ですか！」

『リシェロー遊ぼうよー』

私の名前をいつも間違えて呼んでるのは土の精霊たち。リシェル、なのに最後の文字を勝手に“ロ”に代えてしまっている。なんでか理由をきくと『リシェロはリシェロだろー！』って笑いながら言われてしまった。

その声は二人には聞こえていないらしく火の精霊に釘付けだ。火の精霊が見つめられてオロオロしていたから私は両の掌で精霊を包み込み二人の視線から助けてあげた。

「おい、リシェル何をする！」

「精霊が嫌がってるんです」
「たしかに……オロオロしてましたね」
『人間怖い人間怖い……』
……トラウマになっちゃったかな。

０３　王子様と精霊（後書き）

おはこんばんわ、黒猫です。
お久しぶりです。
いやぁ……精霊可愛いな精霊（はぁと←きもい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0299v/

空気少女と王子様

2011年8月20日14時27分発行